

問い4 他人からどう思われているのか、気になって仕方ありません

連研中央講師・新潟教区
旭 勲

今から数年前に「KY」という言葉が流行しました。「空気（K）が読めない（Y）人」を略したもので、どちらかという悪い意味で使われていましたが、皆さんにも思い当たるようなことがあったでしょうか。

自分の意見を通す（述べる）ことよりも、その場の空気（雰囲気）を察知して、全体に合わせていくことの方が大切であり、求められている、ということであらわす言葉だったように思います。それは〈集団主義〉ともいわれ、特に日本人の多くがそのような考え方をする傾向にあるようです。

考えてみますと、古くから伝わる言葉にも、同じような意味のものがいくつかあります。「長いものにはまかれろ」「郷に入っては郷に従え」「出る杭は打たれる」等々、古来より自らの意見が全体と違う場合、それを人前で言わないことを美徳としてきたことのあらわれなのだろうと思います。もちろんそれがすべて悪いというわけではありません。むしろその方が争いもなく、スムーズに物事が進むということもあると思います。しかし、大人数の前では言わなくても、別の場所で少人数になると本音や陰口を言っている、ということも多々あるように思います。また、自分の意見を言わないだけにとどまらず、少数意見を無視したり、阻害したりするようなこともあるのではないのでしょうか。

誰もが多かれ少なかれ〈本音〉と〈建て前〉を使い分けて生きています。しかし、自分の意見〈本音〉を言わず、他人の意見を阻害するような生き方は、そのまま〈生きづらさ〉へとつながっていくのではないのでしょうか。

我が家の長女が小学5年生の頃、2月の中旬にこんな出来事がありました。

沢山のチョコレートや器材を買い込んできて、母親と一緒に夜遅くまで〈友だち〉に配るためのチョコレート作りに励む姿がありました。それを見た私が「そんなに沢山作るのは大変じゃないの？」と尋ねると「クラスのみんながしているから、私もしないといけない」と答え、また「作るのは大変だけど、あまり考えずにみんなにあわせて同じことをする方が楽だから」とも言っていました。小学生でもすでに周りと同じことをしないとイケない、人と違うことをして疎外されたくない、という思いの中で集団生活を送っていることに、改めて気づかされました。

そのようなことは〈同調圧力〉ともいわれ、全体（多数派）と同じことをする人が正しくて、違うことをする人（少数派）は間違っている、というよ

うな雰囲気を作り出すことにつながっていきます。このような、お互いの意見や行動の違いを認め合うことをせず、阻害しあうことこそ〈生きづらさ〉の根底にあるものではないでしょうか。

阿弥陀さまは「あなたはあなたのままでいい。そのままのあなたが素晴らしい」と、私のいのちそのものを認め、褒めたたえてくださっています。その教えを聞かせていただく私たちも、他者の考え方を認め、受け入れていくことが大切なのではないのでしょうか。そしてそれは、自分自身を認めていくことにもつながっていくのだと思います。

歌手の槇原敬之さんが作詞された『世界に一つだけの花』の歌詞に、「この中で誰が一番だなんて 争うこともしないで バケツの中誇らしげにしゃんと胸を張っている」というものがあります。たくさんの花があって、いろんな色があるけれど、どの花が一番美しいかを争うのではなく、自分自身のいのちを精いっぱい輝かせて生きていることの素晴らしさを表現された歌詞だと思います。

私たちも同じように、誰かと比べて自分を蔑むことのないように、周りの雰囲気に流されて考えることを止めることのないように、自ら考え、行動していくことを大切にしていけたらと思います。

阿弥陀さまという確かなより所をいただいた私たち一人ひとりが自律し、お互いを認め合いながら協力、連帯することによって、より良い社会を築き、生きづらさからお互いを解放していくことになっていくのではないのでしょうか。

問い4 他人からどう思われているのか、気になって仕方ありません。

連研中央講師・兵庫教区
宰務 清子

以前特急列車に乗った時に、4人の学生さんと近い席になりました。女子旅のようで、楽しそうに会話をしています。不意にその中の一人が「みんな自由に生きたらいいのに」と言い、その言葉に私は「ドキッ!」としました。

自由に生きられたらどんなに素敵でしょう。でも実際には、とても難しいことです。キラキラと屈託のない笑顔で話す彼女たちも、もしかしたら息苦しさを感じているのかもしれない。

人は赤ちゃんのころは快、不快、好き、嫌いなどの感情が中心の生活を送ります。それが大きくなるにつれて、周りとの関係を通じて世の中の仕組みが少しずつ分かり、やがて大人になり、物事に窮屈さを感じながらも折り合いをつけるようになります。今の私は、居ても良いはずのさまざまな場で「私はここに居て良いのだろうか」と違和感を覚えてしまいます。

私はお寺で生まれ育ちましたが、小学生のころから「うちだけ何か違う…」と感じていました。敷地(境内)に家(庫裏)だけでなく本堂も建ち、近所の人(ご門徒)が集まって来られます。何より、両親が黒い衣を着ていました。お寺が宗教施設と理解したころ、宗教を名乗る団体の事件が頻発し「宗教=危ない、怪しい」というイメージを世の中がもつようになりました。そこで他からどう見られているかが気になるようになりました。やがて私も僧侶となりました。今でも地域社会で生活する中で、自分の子どもたちが他から違った目で見られないようにと、気を遣います。

僧侶の世界なら安心かということ、そうではありません。そこでも「私は異分子だ」と思うことがあります。僧侶の世界では多くの男性が活躍されていますが、以前とは異なり、面と向かって女性が排除されることは、あまりありません。

その中でも、私には不思議に見えるものがあります。それは男性同士の力関係を示そうとする態度や、そこで繰り広げられる光景です。おそらくほとんどの男性にとっては当たり前のことなのでしょう。

私はその力関係に入っていくことは、自分の立場としても価値観としてもありません。しかし、自分だけがその場に相応しくない気がして、孤独を覚えます。まるで透明人間になったような気持ちになります。他の人と同じように思い振舞えたらどれだけ楽だろうと思いますが、それでは別の苦しみが起こりそうです。

上に挙げた場だけではありません。さまざまな場所で、他と同じであろうと心を砕いたり、違いに不安を覚えたりしながら生きているのが、私です。それと同

時に、私の普段の言動が日々の暮らしの中で、他に同調を強いて排除する立場になっているかもしれないと気づかされます。

暮らしの中で人と関わり、苦悩が生じます。それでも人は決して一人では生きていけません。他との関わりの中で生きています。そして関わりがあるからこそ、見えてくるものがあります。

『仏説無量寿経』(大経)には、阿弥陀さまの建立された国、お浄土の様子についてこのように述べられています。

「また色々な宝でできた蓮の花がいたるところに咲いており、それぞれの花には百千億の花びらがある。その花の放つ光には無数の色がある。青い色、白い色とそれぞれに光り輝き、同じように黒、黄、赤、紫の色に光り輝くのである。それらは鮮やかに輝いて、太陽や月よりもなお明るい。それぞれの花の中から三十六百千億の光が放たれ、三十六百千億の仏がたが現れる。(『現代語版浄土真宗聖典浄土三部経』 p69)

ここには『どんな色もそれぞれに輝く、大切な存在である』と表されています。蓮の花はそれぞれ異なった素材でできており、それぞれの色や形をもっています。それぞれがそれぞれの色で輝きますから、光の色は数えられないほどの種類があります。そして互いに照らし合っています。違ってこそ素晴らしいと示されています。

さらにここには『みんな同じ色だとわからない。違う色同士がいるから、その色がわかるのだ』とも示されています。もし私が青い花で青い色の花ばかりの中に咲いていたら、自分が青いとわからないでしょう。周りとは自分が違う色だからこそ、自分の色の違いがわかります。自分のことは自分だけではわかりません。

「私」とは、他との関係性の中で明らかになるものだと知らされます。

浄土に咲きお互いに照らし合う花の姿は「他と違っていて当たり前」「違っていているからこそ素敵なのだ」「違ったお互いが照らしかうから尊いんだ」と教えてくれます。違いから豊かな関係が生まれることが示されています。

そして、お浄土の豊かな関係は私たちに、他との関わりの中でこそ、自分らしさを知らされると示します。異なった感性や在り方は、私を私として成立させる、とても大事なものでした。

しかし、私たちの生活の中には、互いの差異を肯定的に思えない場面が沢山あります。だからこそ、語り合い、知り合いたいと思います。異なった感性や在り方を共有できる場を大切にしたいと思います。